

グローバル環境において  
不可欠となった  
MOT(技術経営)とMOT人材

パネルディスカッション  
社会との協創を目指す教育環境の実現

東京工業高等専門学校  
2014.9.9

ニチコン株式会社取締役  
立命館大学 総合科学技術研究機構 上席研究員  
立命館大学 テクノロジー・マネジメント研究科 (初代)研究科長・教授  
阿部 惇

1

1. 共創(共に育てる)の実践の  
ために必要なこと

2

考え方のポイント

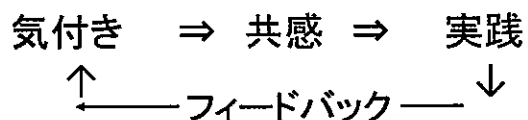
- 異質な視点を持ったメンバーでチームを構成すること
- 出来る限り、「できること、なすべきこと、したいこと」を一致させること
- 答えは一つではないことを前提とすること
- 気づきと共感をもとに試行錯誤すること

3

異なる視点を持つ複数の人が会って対話することによって創り出される新しい情報は、アイデアの膨らみや知恵が加わり、自分の独りよがりな情報よりも重要な意味をもつことが多い。

(進藤晶弘、日経産業新聞、2013.05.14)より作成

4

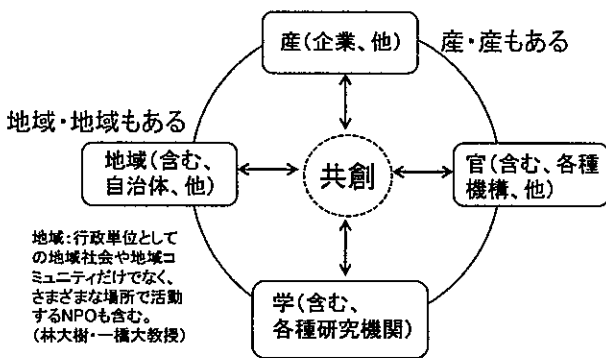


5

2. 地域創造マネジメントを  
ベースにした共創の考え方

6

産・官・学・地域のチームによる  
MOTを核とした地域創造マネジメントの概念図

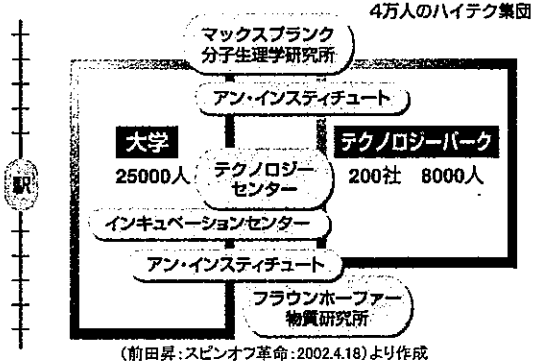


7

3.ドイツの成功事例の紹介

8

ドイツのアン・インスティテュート(大学隣接研究所)の事例



9

ドイツのアン・インスティテュート(大学隣接研究所)

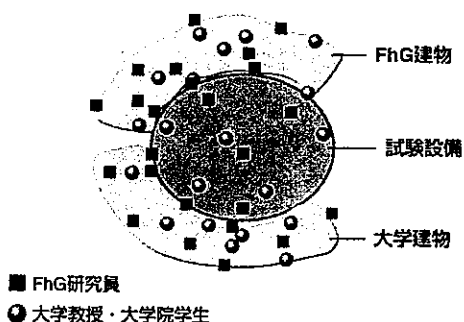
財団法人または有限会社として法人形態を持っている。大学や州が公式に認めて資金援助などもしている応用・開発研究施設。このアン・インスティテュートは、日本的な技術移転という産学連携ではなく、産と学とが同じ屋根の下で数年間同じ目的のもとに結合して何かをやり遂げる産学結合の状態である。

(前田昇: スピンオフ革命: 2002.4.18) より作成

10

ベルリン工科大学 & FhG 生産システム設計技術研究所の事例

(前田昇: スピンオフ革命: 2002.4.18) より作成



11

ベルリン工科大学機械工学部とフラウンホーファー協会のベルリン生産システム設計技術研究所はノンリニアな結合の事例

(前田昇: スピンオフ革命: 2002.4.18) より作成

教授も研究者も年間を通じて情報や発想のやり取りをしている。さらに教授も研究者も、多くの場合、産業の経験を5年以上持っている。

12